

保育学生による地域子育て支援の取り組み —2016年度活動報告—

**A Community Parenting Support Program by Students in Early Childcare
Practical Training School: A Report of the Activity 2016**

Z. 山田章子 ・ 鎌田雅史
松本 希 ・ 伊藤 優
荊木 まき子 ・ 笹倉千佳弘
柴川 敏之 ・ 秋山 真理子
澤津 まり子 ・ 田中 誠

保育学生による地域子育て支援の取り組み

—2016年度活動報告—

A Community Parenting Support Program by Students in Early Childcare

Practical Training School: A Report of the Activity 2016

Z. 山田章子 (幼児教育学科)・鎌田雅史 (幼児教育学科)

Z.YAMADA Akiko

KAMADA Masafumi

松本 希 (幼児教育学科)・伊藤 優 (幼児教育学科)

MATSUMOTO Nozomi

ITO Yu

荊木まき子 (幼児教育学科)・笹倉千佳弘 (幼児教育学科)

IBARAKI Makiko

SASAKURA Chikahiro

柴川敏之 (幼児教育学科)・秋山真理子 (幼児教育学科)

SHIBAKAWA Toshiyuki

AKIYAMA Mariko

澤津まり子 (幼児教育学科)・田中 誠 (幼児教育学科)

SAWAZU Mariko

TANAKA Makoto

はじめに

本学幼児教育学科では、子育て支援を目的とした学生ボランティアグループG B A (Girls and Boys Be Ambitious の略、以降「G B A」と記す。)を結成し、2016年度で11年目を迎えた。G B Aの主な活動は、「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」の開催であり、過去10年間の取り組みについては既に報告済みである^{1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10)}。

昨年度の報告では、今後の課題として、「10周年における就実やんちゃキッズの見直し」、「学生間の報告・連絡・相談体制の充実」、「全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり」の3点を挙げた。それぞれの課題について、もう少し詳しい説明を加えておく。

「10周年における就実やんちゃキッズの見直し」については、G B Aの活動が活発になり規模が拡大し、地域における認知度が高まり多くの来場者を迎えるにあたって運営上の課題が出てきたため、学科のFDでも審議事項として取り上げ真摯に議論する必要があり、また学生主体のボランティアグループであることから、学生たちとどのようにG B Aを発展させていくかしっかりと話し合う必要があるということである。

「学生間の報告・連絡・相談体制の充実」については、特定の学生グループに役割が集中してしまいリーダーの役割が過剰になる傾向や、全体での連絡・調整が不十分で参加できるメンバーが不明確なまま当日を迎え混乱するといった問題、また、スマートフォンの普及による一方的なコミュニケーションが引き起こす学生間の連携の不具合がみられるように

なったことから、その改善のため、報告・連絡・相談体制の充実を図っていくということである。

「全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり」については、子育て支援ボランティアという原点に立ち返り、来場者が安全に気持ちよく利用できるように創意工夫を積み重ねていくということである。

本報告は、上記のような課題解決を念頭においてすすめた、2016年度の地域子育て支援の取り組みについて、経過及び結果をまとめたものである。

1 活動内容

1) 「就実やんちゃキッズ ～きてみてあそぼうでえ～」

本年度は、子育て支援ボランティアグループGBA結成10周年の節目にあたる年であり、本学体育館アリーナを解放して、地域の子育て世帯を迎える子育て支援イベントである「就実やんちゃキッズ ～きてみてあそぼうでえ～」は9年目を迎えた。

プログラム前半は、パネルシアター・リズム体操・オペレッタ・手遊び、後半は様々な遊びを行うことのできる「交流広場」で構成している。公演内容及び参加人数を表1に、それぞれのプログラムの様子を写真1-6に示す。

表1 就実やんちゃキッズ活動内容

日 時	公 演 演 目	参加人数	学生数
第1回 5月21日	パネルシアター 「鳴き声とりかえっこ」 リズム体操 「にんじゃってなんじゃもんじゃ」 オペレッタ 「大きなかぶ」 * 幕間に手遊び、公演後交流広場	大人 170人 子ども 228人	45人
第2回 6月25日	パネルシアター 「暑さに負けない4つの約束」 リズム体操 「踊れ・どれ・ドラ・ドラえもん音頭」 オペレッタ 「ごしごしがらから」 * 幕間に手遊び、公演後交流広場	大人 158人 子ども 197人	91人
第3回 11月26日	パネルシアター 「犬のおまわりさん」 リズム体操 「サンサン体操」 オペレッタ 「おやさいもぐもぐ～おいしく食べて元気いっぱい～」 * 幕間に手遊び、公演後交流広場	大人 161人 子ども 142人	83人
第4回 1月21日	パネルシアター 「冬の日のおさんぽ」 リズム体操 「秘伝！らーめん体操」 オペレッタ 「大きなかぶ」 * 幕間に手遊び、公演後交流広場	大人 157人 子ども 212人	95人

*第3回就実やんちゃキッズ以降は、1年生が中心となって開催する。

本年度は、『からだをうごかそう 1・2・3!』をテーマとして、子どもたちが楽しくしっかりと体を動かすことのできるように、公演部分ではパネルシアターやオペレッタにおいても積極的に音楽やダンス、運動を取り入れるなどしてプログラムを編成した。昨年同様、リズム体操では、子どもたちに前に出てきてもらうよう声掛けをして学生と一緒に体操をしたり、パネルシアターやオペレッタでは音楽に合わせて一緒に体を動かしたり、舞台から子どもに呼びかけて子どもたちもお話に参加できるようにするなど、子どもたちが能動的に参加



写真1 パネルシアター



写真2 リズム体操



写真3 オペレッタ



写真4 手遊び(幕間)



写真5 交流広場(魚釣り)



写真6 交流広場(すべり台)

しながら楽しむことができるように工夫した。

なお、6月のオペレッタ『ごしごしがらから』は、平成26年度に幼児教育学科の学生が中四国保育学生研究大会で発表した演目である。幼児教育学科では、例年、有志の学生が中四国保育学生研究大会に参加し、一年をかけて試行錯誤して制作したオリジナルのオペレッタを発表することが恒例となっているが、大会後に創作オペレッタを演じる機会は附属のこども園での凱旋講演を除きほとんどなかった。本年度、初めて就実やんちゃキッズで過去の演目がG B Aのメンバーにより演じられたことに関して、OGからは『取り上げてくれてうれしかった』との声が寄せられた。オペレッタの内容は、子どもたちに向けて手洗いうがいの大切さを表現した作品であり、手洗いうがいのオリジナルダンスを会場全体で楽しみながら踊ることができ、好評であり有意義であった。今後も、先輩たちのオリジナルストーリーを引き継いで講演することにも挑戦していきたい。

2 今年度の課題の達成状況

1) 10周年における就実やんちゃキッズの見直し

現在のG B Aは幼児教育学科の在学生のおよそ半数が所属し、就実やんちゃキッズに関しても毎回300名を超える来場者を迎えるまでに発展し、本学科の特色として地域社会に認知されるまでになってきた。その一方で学内外の状況も変化し、活動規模も大きくなり、教員・学生ともに現状のままボランティアとして継続していくには負担が増え多くの課題が認められた。本年度、将来的に本活動を持続的に発展させるため以下の3点について見直しを行った。

i) 幼児教育学科としての就実やんちゃキッズの位置づけ

就実やんちゃキッズを運営するG B A・中四は学生主体のボランティアグループであり、幼児教育学科はその支援者として位置付けられてきた。実際、すべての活動は学生が中心となってい、教員は学生が安心して活動に打ち込むことができるように予算管理や保険契約

等の事務管理や広報、運営におけるトラブルのサポート、表現や造形等に関する助言・支援などを担当してきた。これは、学生の主体性を重んじる本学科の理念に基づいている。

一方で就実やんちゃキッズはボランティア活動としてではなく、公式的な学科の教育活動としての役割も担うように発展してきた。例えば、初年次教育の一環として全学生に一度はやんちゃキッズに参加する機会を設けたり（写真7）、授業で製作した手作りおもちゃ等を持ち寄って地域の子どもと遊ぶ課題を課したり、卒業制作として2年生がダンボールハウスの展示を行う機会とするなど（写真8）、就実やんちゃキッズと本学科の教育カリキュラムとは密接に関係している。

また、分掌としての担当教員は毎回土曜日に出勤することが求められ、事務作業の量も多く、トラブルなどがあった時には窓口となる必要があり、継続していくには負担が大きくなってきていることも問題視され、学生ボランティア支援という位置づけではなく、教育活動に位置づく公式的な分掌であることを確認する必要が認められた。

以上の点を踏まえ学科で協議を重ねた結果、就実やんちゃキッズの活動は学生主体であることは変わらないが、それに関わる教員の役割や、就実やんちゃキッズの場を利用した教育活動は公式的な業務であることが確認された。また、特定教員の負担が過度にならないように、毎回の就実やんちゃキッズに可能な範囲で教員全員が出席し、他の学科行事と同様に役割を分担することが確認された。G B A担当者は、事務作業や、役割分担のコーディネーター等について公務分掌として行う。

ii) 学生にとってのやんちゃキッズの意味

就実やんちゃキッズは、地域の子育て支援イベントであり、子育て世帯が安心して楽しむことができる場を提供することが目的である。この点に関しては、地域から好評を得ており、『もっとたくさん開催して欲しい』といった要望も多く寄せられている。

一方でボランティアとして企画・準備・運用・改善にあたる学生は、短期大学の保育者養成課程ということもあり、正規の授業数が多く、実習や就職活動など多くの活動も並行するため多忙であり、就実やんちゃキッズの活動が十分に消化できない状態が続いていた。昨年度までは、就実やんちゃキッズを長期休みの期間を除き、ほぼ毎月（年8回）開催していたが、毎回の振り返りや改善も行えないまま次の日程の準備に追われる状況が散見された。また、負担が大きい分、学生間においても活動に対する温度差があり、当日の欠席者が目立つような問題も見られた。

就実やんちゃキッズを学科の教育活動としてとらえた場合、地域貢献の場であると同時に学生の成長の場でもある。しかし、スケジュールに追われて十分に準備も振り返りもできないまま実施せざるを得ない状況が続くことは、決して望ましいものではない。この点について、一回一回の活動を丁寧に行うためには、開催スケジュールを見直す必要性が認められた。

iii) 学内環境の変化と開催回数の見直し

継続して課題となっている事項として、駐車場の確保の困難さが挙げられる。学内の建造

物の耐震工事、大学および学園の規模の拡大などで、かつて使用していた駐車場は使用不可となり、会場から少し離れた位置の駐車場に変更となった。この駐車場については、併設する小学校、こども園、他学部の行事等で利用されることも多く、来場者に対して十分な収容台数の確保が難しい現状がある。利用者には公共交通機関の利用を呼び掛けているが、乳児の参加者も多く自家用車での来場以外は参加が難しいケースもある。さらに、駐車場から体育館アリーナまでの経路は、2016年現在、新築の校舎の工事中で一部封鎖されており、利用者は学内の敷地を迂回する必要がある。就実やんちゃキッズの運用にあたり、駐車場や会場の案内に人手を割かれ、活動の準備等に支障をきたしている。この点は教員ができるだけ参加し、駐車場や会場案内と体育館アリーナでの学生サポートを分担することで対応してきたが、慢性的な人手不足は続いている。

以上のような課題を踏まえ、学生・教員で協議した結果、年間スケジュールを4回実施とすることとした。就実やんちゃキッズを持続的に発展させていくには、教員・学生ともに負担を軽減し、また毎回の活動を丁寧に行っていく必要がある。なお、従来は保育実習直前の6月の就実やんちゃキッズをもって2年生は引退し、1年生に引き継ぎを行ってきたが、本年度からは年間の実施回数が半減したことを受けて、1年を通して引き継ぎを行う体制に変更することとなった。これにより、保育所、施設、幼稚園実習を経験し成長した2年生が1年生とコミュニケーションする機会や、交流広場等で実際の子どもたちとの触れ合いを1年生が学ぶ機会が増えることが期待される。

2) 学生間の報告・連絡・相談体制の充実

就実やんちゃキッズにおける継続的な課題として、報告・連絡・相談体制の充実が挙げられる。現在、1・2年生の過半数がG B A・中四に所属していることもあり、メンバー数は100名を超える。そのため、リーダーをはじめとする特定の学生への負担が大きくなる傾向と、全体への伝達が不十分である傾向が認められた。平成27年度には、連絡網を作成し連絡係を決めることにより改善をはかったが、時折情報伝達の難しさが見られた。そこで本年度は、さらなる改善を試みた。

本年度においては、年初のミーティングにおいて連絡網を作成し、連絡係を取り決めた。また、リーダーをはじめとする特定の学生への負担が大きくなりすぎないように、毎回の公演部については、月別に演目ごとのパートリーダーを取り決め学生の分担を分散させること



写真7 初年次教育



写真8 ダンボールハウス



写真9 全体ミーティング

で、全体のリーダーについては交流広場や全体の調整に集中できるように再編成を行った。さらに、重要事項についてはメール等での伝達だけでなく、リハーサル後のミーティングなどの対面状況で重ねて学生間で確認し合うように配慮している（写真9）。

3) 全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり

全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくりについて、経年的に課題として掲げ改善にあたっている。本年度においては、以下の点について改善を試みた。

i) 受付まわりの改善

平成27年度から、開場から開演までの最も混雑する時間帯は階段下のホールで受付を行い、「就実やんちゃキッズ」の開演後は、受付を2階ホールへ移動するように変更している。これにより受付周りと会場の連携がスムーズになり、参加者への案内や、会場を抜け出してしまう子どもへの対応が可能になった。学生が時間帯のシフトを組み、交代で受付係を分担している（写真10-12）。

ii) 交流広場の改善

本年度は、幅広い年齢の子どもたちが安心して楽しむことができるように交流広場の各コーナーの充実を試みた。図画工作の授業で習ったことを生かした『魔法の鉛筆コーナー（写真14）』や、2年生のゼミ研究から生まれた『キャタピラーコーナー（写真15）』が新設され



写真10 受付（1階）



写真11 受付（2階）



写真12 手指の消毒



写真13 イベント後の清掃



写真14 魔法の鉛筆



写真15 キャタピラー



写真16 折り紙



写真17 あやとり



写真18 プレイマット

交流広場の遊びはより充実した内容となった。また、学生が参加者に折り紙の折り方を伝えたり（写真16）、あやとりを楽しんだり（写真17）と伝承遊びのコーナーもさらに充実した内容となった。

また、昨年度に抗菌プレイマットを配置し乳児コーナーを新設したが（図18）、本年度は乳児コーナーが他の利用者の動線と重ならないように交流広場全体の配置を見直し、乳児コーナーの付近は比較的静かな遊びコーナーを配置するように配慮した。

3 アンケートによる振り返り

1) 保護者アンケート

i) 保護者へのアンケートの方法

「就実やんちゃキッズ」では、保護者に受付でアンケート用紙を配布し、「就実やんちゃキッズ」終了時に回収している。アンケートでは、①就実やんちゃキッズの参加回数、②子どもの年齢、③子どもとの続柄、④就実やんちゃキッズのプログラムの内容に関する意見、⑤今後の参加意思、⑥就実やんちゃキッズをどのように知ったかについて尋ねた。

ii) 保護者へのアンケート結果

以下の結果は、「就実やんちゃキッズ（5/21、6/25）」で得られたデータに基づくものである。協力してくださった保護者の数は、273名であり、例えば夫婦で回答している場合など、複数の回答者によって答えられたアンケートも含まれ、回収されたアンケートの総数は246件であった。

a) 就実やんちゃキッズの参加回数

就実やんちゃキッズに参加した世帯ごとに、今回の参加が何回目か尋ねた結果を図1に示す。 χ^2 検定の結果、参加回数に偏りはなかった（ $\chi^2(6) = 5.46, p = .06$ ）。5月と比べ、6月は初参加の世帯がやや減っている傾向がみられ、継続して参加する世帯が一定数いることが示唆される。

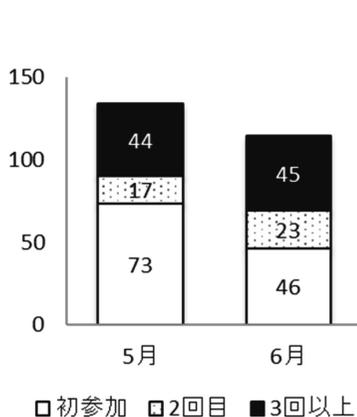


図1 参加世帯の参加回数

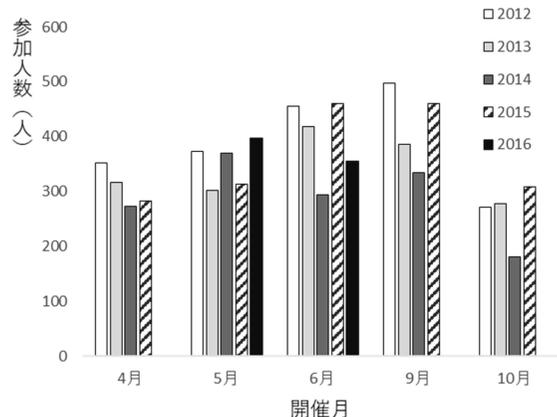


図2 就実やんちゃキッズの参加者の年次推移

b) 参加人数の推移

過去5年における参加者の推移を図2¹に示す。今年度から第一回目が5月開催となったこともあり、第一回目の来場者は過去4年間と比較して多かった。就実やんちゃキッズをどのように知ったかを尋ねたところ、情報源として最も多かったのはホームページ(27.24%)であった(表2)。昨年度は、ポスターや知人を介して知った参加者が多かった。本結果は、保護者世代がインターネットを通じて子育て情報を収集していることが伺える。

表2 就実やんちゃキッズをどのように知ったかについて

	ホームページ	ポスター	チラシ	新聞	知人	就実の関係者	その他	無回答
人数(人)	67	50	32	14	42	16	1	24
割合(%)	27.24	20.33	13.01	5.69	17.07	6.50	0.41	9.76

c) アンケートの記入者と子どもの関係

アンケート記入者と子どもの関係について表3に示す。引率者の多くは母親であり(76.55%)、次いで父親(20.15%)、祖母(2.20%)の参加が多かった。アンケート記入者のうち、夫婦で一緒に回答しているケースが14件(アンケート246件のうち5.69%)あり、父もしくは母と一緒に祖父母が回答しているケースは、6件(アンケート246件のうち2.44%)であった。アンケート調査を開始して以来、父親の引率は毎年増加し続けている。

d) 子どもの年齢について

1世帯辺りの子どもの参加人数は、全世帯246件のうち、49.19%(121件)が1人、45.93%(113件)が2人、6.10%(15件)が3人以上であった。子どもの総数は386人であり、年齢の分布は表4の通りである。3歳未満の子どもの割合が58.29%と半数を超えていた。

e) プログラムについて

e-1 全体の時間

やんちゃキッズは、90分間のプログラムで開催している。プログラムの長さについて、参

表3 引率者の割合

	人数 (人)	割合 (%)
母	209	76.56
父	55	20.15
祖母	6	2.20
祖父	2	0.73
その他	1	0.37
保護者合計	273	100

表4 参加した子どもの年齢

	人数 (人)	割合 (%)
1歳未満	53	13.73
1歳	76	19.69
2歳	96	24.87
3歳	59	15.28
4歳	49	12.69
5歳	44	11.40
6歳以上	9	2.33
合計	386	100

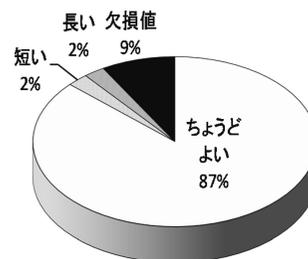


図3 プログラムの長さ

¹ 2012年～2015年は、第一回目4月、第二回目5月、第三回目6月、第四回目9月、第五回目10月開催であった。2016年から第一回目5月、第二回目6月開催となった。

加者の印象を図3に示す。参加者の86.75%がちょうど良いと答えており、プログラムの長さは適切であることが示された。

e-2 特に良かったと思うプログラム

良かったと思うプログラムについて、保護者と子どもに回答を求めた（複数回答可）。保護者と子どもが選んだプログラムを表5に示す。昨年に引き続き、保護者も子どもも、交流広場を良かったとする割合が最も多かった。また、二番目に多かったのがリズム体操という点に関しても、昨年度と同様の結果が得られた。これらの結果からも、学生もしくは保護者と子どもが一緒になって行うことのできる遊びに対する満足度が高いことが示された。

表5 特に良かったと思うプログラム

	手遊び	パネルシアター	リズム体操	オペレッタ	身体測定	交流広場	その他
保護者	70	51	115	63	42	162	5
(%)	28.46	20.73	46.75	25.61	17.07	65.85	2.03
子ども	33	19	66	28	7	133	7
(%)	8.55	4.92	17.10	7.25	1.81	34.46	1.81

f) 今後の「就実やんちゃキッズ」への参加意思

図4に示す通り、保護者に対して「次回も参加したいと思いますか?」と尋ねた結果、「思う」と答えた参加者が77.51%であり、「思わない」と回答した参加者はいなかった。参加したいと答えた参加者は昨年度よりも増えていることから、地域の子育て支援の取り組みとして、本活動は期待されていると言えよう。

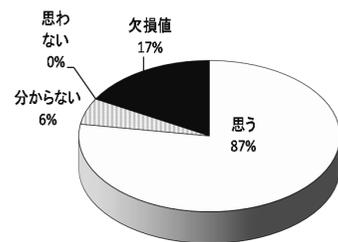


図4 今後の参加意思

2) 学生アンケート

i) 学生へのアンケートの方法

本アンケートは、学生自身が活動を振り返り問題点を抽出することで、「就実やんちゃキッズ」の改善することを目的にしている。「就実やんちゃキッズ」終了後の反省会時に、学生に用紙を配布し回収した。質問紙は、①公演について振り返り（11項目）、②交流広場（子どもとのふれあい）に関する振り返り（10項目）、③全体に関する満足度の振り返り（2項目）の23の振り返り項目から構成されている。各項目について「あてはまる（5点）」「少しあてはまる（4点）」「どちらでもない（3点）」「ややあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」の5件法にて回答を求めている。加えて、公演と交流広場での活動それぞれに関し、学生がどのような課題を意識するようになったかについて自由記述による回答を求めた。5月の「就実やんちゃキッズ」は2年生のみで実施し、6月は1年生と2年生の混合で実施した。各回でアンケートに回答した学生数は、5月（45名）、6月（91名）であった。

ii) 学生へのアンケート結果

a) 調査項目の記述統計量

質問項目の集約と今後の改善を目的に、アンケートの各項目に関する、平均値、標準偏差、1変量の t 検定における95%信頼区間について表6に示す。学生が楽しみながら、積極的に子育て支援ボランティアの活動を行っていることが伺えた。

表6 調査項目の記述統計および一変量の t 検定における95%信頼区間の推定

	有効 N	平均値	中央値	標準偏差	標準誤差	信頼区間	
						95%下限	95%上限
公演について							
事前準備・練習がよくできた。	135	3.48	3.00	1.09	0.09	3.30	3.67
保育に関する技術が身についた。	135	3.77	4.00	0.93	0.08	3.61	3.93
人前で演技することが上手になった。	132	3.30	3.00	1.12	0.10	3.10	3.49
意識して笑顔ができた。	133	4.08	4.00	1.15	0.10	3.89	4.28
積極的に活動できた。	135	3.84	4.00	1.04	0.09	3.67	4.02
みんなと協力することができた。	135	4.13	4.00	1.04	0.09	3.96	4.31
臨機応変に行動することができた。	135	3.53	4.00	1.02	0.09	3.36	3.71
自分自身で創意工夫した。	135	3.40	3.00	1.00	0.09	3.23	3.57
自分の役割がきちんと果たせた。	135	3.91	4.00	1.08	0.09	3.73	4.10
新たな課題が見つかった。	130	3.88	4.00	1.13	0.10	3.68	4.07
交流広場について							
子どもと積極的に交流できた。	134	4.25	5.00	1.09	0.09	4.06	4.43
保護者・高齢者と積極的に交流できた。	134	3.41	4.00	1.10	0.10	3.22	3.60
遊びのレポーターが増えた。	134	3.40	3.00	0.97	0.08	3.23	3.56
自分も楽しく参加できた。	134	4.34	5.00	1.04	0.09	4.17	4.52
自分に自信がもてるようになった。	133	3.53	4.00	0.82	0.07	3.39	3.67
他人の立場や気持を読み取れるようになった。	134	3.48	3.50	0.84	0.07	3.33	3.62
子どもについての理解が深まった。	134	3.87	4.00	0.92	0.08	3.72	4.03
子育て支援への理解が深まった。	134	3.74	4.00	0.89	0.08	3.59	3.89
新たな課題が見つかった。	126	3.83	4.00	1.13	0.10	3.63	4.02
全体的な満足度							
全体的に今日の活動に満足できた。	119	4.18	4.00	0.97	0.09	4.00	4.35

また、全体平均の95%信頼区間の推定値が「4：少し当てはまる」に満たない項目については、今年度の学生の課題として捉えることができる。今年度の学生スタッフは、公演に関しては、「人前で演技することが上手になった」「自分自身で創意工夫した」「事前準備・練習がよくできた」といった項目において特に課題を感じていた。2年生にとっては実習前で練習時間や準備が十分とれなかった中での実施となり、今後は限られた時間をどのように有効に使うか検討していく必要があるだろう。また、交流広場については、「保護者・高齢者と積極的に交流できない」や「遊びのレポーターが増えた」などに課題を感じていた。子どもはもちろん、保護者や地域の方も積極的にコミュニケーションを取っていくことも今後の課題といえるだろう。

b) 1年生の取り組みの経時的分析

振り返りアンケートにおける、1年生の公演および交流広場に関する得点を合算した、月ごとの変化について、図5に示す。合算した時のクロンバックの信頼係数は公演については $\alpha = .89$ 、交流広場については $\alpha = .89$ であった。

満足度と交流広場における振り返り ($r = .75$)、公演に関する振り返り ($r = .76$) との間には強い正の相関関係が認められた。学生は、毎回就実やんちゃキッズの活動を実施する度に、そこから自身の課題を見出していたと推察される。

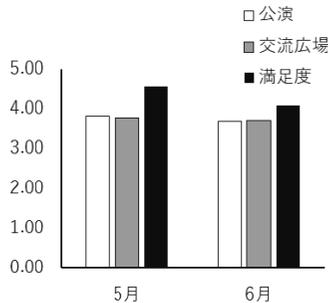


図5 公演・交流広場・満足度の月ごとの変化

表7 交流広場、公演の振り返りおよび満足度の記述統計と相関値

	公演	交流広場	満足度	有効 N	平均値	標準偏差
公演	—			126	3.74	.74
交流広場	.83**	—		126	3.74	.73
満足度	.76**	.75**	—	119	4.18	.97

** $p < .01$

3 おわりに

1) 今後の課題

本年度をもってG B Aの活動は10周年を迎えたが、次年度には本学体育館アリーナでの『就実やんちゃキッズ』が10年目を迎える。本年度は、就実やんちゃキッズが持続的に発展していくことができるように抜本的な見直しが行われた。より地域に貢献し、学生にとっても意義ある活動となるように、次年度以降の課題として以下の3点を提示する。

i) 学科の教育カリキュラムとの連動

本年度、就実やんちゃキッズが学生主体の活動であると同時に、幼児教育学科の公式的な教育活動の場でもあることが確認された。これにより、G B Aや中四のメンバーとして自主的に参加している学生はもちろんのこと、それ以外の学生も含めた全体にとっても、これまで以上に意義のある活動を展開していくことが望まれる。この点については、就実やんちゃキッズとそれぞれの教育活動との関わりに関して、学科のFDの議題として取り上げアイデアを出し合っており、次年度以降に実践していく予定である。

ii) 新体制での安定化

本年度の変更によって、就実やんちゃキッズの年間回数が少なくなったことから、活動の質を安定させ、学生のモチベーションを維持すること、就実やんちゃキッズの開催感覚が長くなることから広報上の問題など新たな課題が想定される。本年度の状況を確認しながら、今後の対策を協議し、より安定的な実施体制を構築するため引き続き改善していきたい。

iii) 全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり

就実やんちゃキッズの活動目的は、『地域の子育て支援』である。全ての参加者がより安心して快適に楽しむことのできる活動を目指し、本課題については次年度も継続して改善につとめる。来場者が安全に気持ちよく利用できるように、教員・学生ともにアイデアを出し合い創意・工夫を積み重ねていくことは、就実やんちゃキッズの活動の改善のみならず、学

生の子どもや保護者を思いやる心を育む貴重な機会となる。これらの思いやりは、学生たちが将来専門職に就いたときに必ず求められる資質であると考ええる。

謝辞

2016年度の子育て支援ボランティアグループG B A及び「就実やんちゃキッズ」の活動は、平成28年度就実大学・就実短期大学学術・文化・スポーツ奨励金を受け実施した。記して深謝致す次第である。

引用文献

- 1) 村田恵子、澤津まり子、立石あつ子 (2006). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—備前地域子育てキャラバン事業報告—、就実論叢、36 (社会篇)、pp.135-152.
- 2) 澤津まり子、永田彰子、田中誠、立石あつ子 (2007). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2007年度活動報告—、就実論叢、37 (社会篇)、pp.81-98.
- 3) 澤津まり子、堤幸一、立石あつ子、伊藤真、笹倉千佳弘、田中誠、永田彰子、山根薫子、Z. 山田章子 (2008). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2008年度活動報告—、就実論叢、38 (社会篇)、pp.285-298.
- 4) 澤津まり子、伊藤真、堤幸一、立石あつ子、笹倉千佳弘、Z. 山田章子、田中誠、山根薫子 (2009). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2009年度活動報告—、就実論叢、39、pp.233-247.
- 5) 澤津まり子、立石あつ子、柴川敏之、秋山真理子、堤幸一、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子 (2011). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2010年度活動報告—、就実論叢、40、pp.163-172.
- 6) 澤津まり子、柴川敏之、松本希、鎌田雅史、Z. 山田章子、秋山真理子、笹倉千佳弘、田中誠、山根薫子 (2012). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2011年度活動報告—、就実論叢、41、pp.175-186.
- 7) 松本希、柴川敏之、澤津まり子、鎌田雅史、田中誠、秋山真理子、Z. 山田章子、笹倉千佳弘、山根薫子 (2013). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2012年度活動報告—、就実論叢、42、pp.161-174.
- 8) 松本希、田中誠、澤津まり子、鎌田雅史、秋山真理子、笹倉千佳弘、柴川敏之、Z. 山田章子、山根薫子 (2014). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2013年度活動報告—、就実論叢、43、pp.325-336.
- 9) 田中 誠、秋山真理子、鎌田雅史、蔵永 瞳、澤津まり子、笹倉千佳弘、柴川敏之、Z. 山田章子、松本 希、山根薫子 (2015)、就実論叢、44、pp.291-301.
- 10) 秋山真理子、鎌田雅史、柴川敏之、蔵永 瞳、笹倉千佳弘、澤津まり子、Z. 山田章子、田中 誠、山根 薫子 (2016)、就実論叢、45、pp.209-223.